トォル・コーリング

サトゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トォル・コーリング

【Ｎコード】
Ｎ８６１２Ｃ

【作者名】
サトゥ

【あらすじ】
つうわけで、パクリ小説（というジャンルの確立をもくろんでいます）。第２弾です。今回の題材は海外ドラマ「トゥルー・コーリング」です。この作品だけでも楽しめるように心がけていますが、一応、前作「野ザル。をプロデュース」の続篇です。できればそちらから読んでいただくと幸いです。いろいろとリンクしています。

第1話「ファースト・バイブレーション」（前書き）

あらすじにも書きましたが、とうとう始まりました「野ザル。をプロデュース続篇です。スピンオフ的な感じで主人公が変わります。前作の主人公とキャラかぶってんじゃねえの。と思うかもしれませんが、それは作者の力量のなさと好みの問題。という方向で。

第1話「ファースト・バイブレーション」

２００５年１２月１日木曜日ＡＭ：０７：２２

遠くで目覚ましがなっていた。いや、実際はかなりの近くでなっていたのだが。俺はベッド脇の目覚まし時計に手を伸ばす。つかもうとしたとき、手が当たって時計はベッドから落ちていた。ガッシャン。と音とともにベルは鳴り止んだ。寝ぼけまなこで床を覗きこむと時計は単３電池２本を吐き出していた。

「起きなきゃな・・・」

電池がなければ頼りのスヌーズ機能にも限界がある。俺はボサボサ頭をかきむしりながら制服に着替え始めた。俺の名前はタドコロトオル。いたって普通の高校生３年生。まわりは受験戦争で戦っている人もいるが、自分は適当に専門学校へでも行こうと思っている。何の専門学校かも決めてないが。１階へ降りて居間へいくと家族はすでに朝食をすませていた。妹のハリコ－我が妹ながら変な名前だが、まあ作者の都合だろう。しかし、こんなにも早く作者ネタを出すところが作者らしい－がもう出かけようとしていた。

「あっお兄ちゃん」

「あ？」

「同じクラスのオンミョウジ先輩って彼女いんの？」

「さあ、なんかモテてそうだからいんじゃねえの？同じクラスだけどそんなに仲良くねえしよ」

つうか朝からそんなこと聞くな。と思いつつも

「なんでそんな事聞くんだ？」と言ってしまう。

あ、適当な相槌でよかったか。

「ううん。別に」

俺のウザイ光線を理解してくれたからかハリコはそこで会話をやめて玄関へ向かった。

「じゃあ、先行くね、お兄ちゃん」

妹は同じ高校の1年生だ。兄からみてもそこそこカワイイやつだとは思う。1年生ながら俺が通う風鈴具流須高校の生徒会主催のミス・フウリングルスで3位という快挙を成し遂げたくらいだ。4日前の話で、その日の文化祭はいろんなトラブルがあって客観的にもおもしろかった。俺は行事なんかすすんで参加するタイプではない。クラスのやつからもなんか暗いヤツと思われているに違いない。友達はいるが、それはおいおい語るとして、問題はオンミョウジだ。3年の金持ち4人組L4のひとり、オンミョウジツバサとは同じクラスだ。むろん学校の人気者で俺は気にくわない。まあ、モテたいとも思わない。俺にだって彼女ぐらいいる。まあL4の残り3人や彼女のこともおいおい話すとして。

「まだおはようも言ってねえだろ・・・」長い説明のあとやっと俺はもう家を出た妹にツッコんだ。

「ったくこれだから最近はやれ家庭崩壊だの、家庭内暴力だの物騒な世の中になってきてんだよ。なあ母さん」俺はテーブルにつきながら言った。

「なにブツクサ言ってんの。早く食べなさい。学校遅れるわよ」

へいへい。俺はもう冷めかけたトーストをパクついた。カリカリベ

ーコンは冷めてもウマイ。

「ばあちゃんは？」

「もう起きて散歩に行ったわよ」

「相変わらず元気だな」

俺は、俺、両親、祖母、妹の５人で暮らしている。郊外ながら一戸建て（そういえばガキのころ普通に一個建てだと思ってたし、慰謝料も医者料だと思ってた）を建てた親父を尊敬する。Ｌ４に入れなくても、俺は今の生活に満足している。まあ、この顔じゃあ入れないか。金持ちでイケメン。これがＬ４の条件。らしい。

「ごちそうさま」

家庭崩壊を恐れる俺は、きちんとあいさつをして玄関へ向かった。お気に入りのプーマのスニーカーを履く。映画アイランドを観て「そうだ。プーマ買おう」とその帰りに購入したものだ。

「あんた、髪伸び過ぎよ」母親が浴室から洗濯物を抱えながら出てきて言った。

「わあったよ。今日髪切ってくる。金は？」

俺は玄関の鏡をみた。これじゃあ少年アシベだな。けっこう気に入ってるけど。

母親はエプロンで手をふきながら（なんか典型的な母親でいいな。と思ったことは秘密だ）玄関まで来てくれた。

「ハイ」とエプロンのポッケから１万円出す。いやいや、準備してたのか？

「えっ。こんなにいいの？」

「お釣りは返しなさい」

へいへい。

「んじゃ、いってきます」

学校までは徒歩１０分。この時間はメールチェックの時間だ。といっても大半は迷惑メールだが。

「おっ」とひとりごとを言うほどテンションが一瞬で上がる。友人の「リンジ」（これまた変な名前だが、作者の都合だろう）からのメールはとりあえず無視して俺は恋人の「ルコ」（作者の都合にしてはいい名前だ）のメールを開けた。

『今日、昼休みにいつもの場所でね。』

イヤッホウ。つきあって1ヶ月だが、やっぱりこういうのは嬉しい。ルコは同じクラスで、メガネが似合う女の子だ。2学期で隣りの席になり話すようになった。もともと2人とも本が好きなおかげですぐに打ち解けた。もっぱら俺は推理小説しか読んでいなかったが。もともと彼女もクラスで目立たない方だったので暗い2人は意気投合ってな感じでつきあうことになった。秘密にはしていないが、まあクラスの関心もなく話題にも上ってないと思われる。

「よし。クリスマスこそ・・・」

いろんな妄想に胸をふらます俺はこの時、いつも絵文字を使っているメールがただ文章のみであることに疑問は持たなかったし、これから悲劇ってやつを2つ迎えるうえにそれを2回も繰り返すとは思わなかった。いや。本当の悲劇ってやつはひとつだけだった。

第1話「ファースト・バイブレーション」（後書き）

この小説の日付の頃「トゥルー・コーリング」にハマりまして。続篇にうまく合わせられるなと。書き始めました。現時点で８話まで完成しています。それ以降は更新遅れると思いますが、最後までおつきあいいただきたいと思っています。

第2話「リライト・デイライト」

教室につくなり、リンジが話かけてきた。

「いよ！トォル君」

「だからそのトォルってやめろよ。トオルなの。でっかいオなの」

だいたい「トォル」って言いにくいっつーのに。わざわざコイツは。

「いいじゃん。いいじゃんトォール君。でハリコちゃんは元気？」

「あぁ！？」

「なになにその不機嫌さ加減。美容師役のぉ！キムタクのぉ！モノマネぇ！」

「おまえな、そのしゃべりかたオサレだと思ってやってるならやめとけ。親友にこれ以上、殺意は覚えたくないね」

「だー。もう。わかったよ。で、どうしたの。大丈夫だってハリコちゃんを狙うのは、お前の妹だと知った時点であきらめた俺が聞いてやるよ」

「言っておくがお前を弟にはしたくないからな」

俺は教室の後ろでひとり読書なんかしてるオンミョウジをチラリと見て言った。

「それがさ、『オンミョウジ先輩って彼女いんのかな？』だとよ」

「でゅわ！マジでか。アイツモテモテだもんな。でもさ、知ってるか？アイツ最近ふられたらしいぜ。２年のハミガノリコに」

「ふうん」どうでもいい話だった。

「なんでも『他に好きな人ができたから』って言われたらしいぜ」

「だっせえ」

「さすがのＬ４もかたなしだな」

「でもＬ４なら、女の子なんてすぐ寄ってくるし。余裕で口説ける

だろ」
「その通り！今狙ってるのは同じ2年のミナミヨウコらしいでっせ。つうかどちらも学年で1、2を争う美女ってとこがスゴイけど。まあ同じ2年でも俺のイチオシは最近話題のサルノシンコだな。知ってる？」
「知らね・・・。あっ。文化祭のモエモエ選手権の」
「そう！マジでモエーだよな」
「いや、それを言ったら俺のハニーもナカナカだぜ」
俺は教室に入ってきたルコを見た。目が合う。
「おはよう」
「お、おはよ」
なんだこの違和感。嫌な予感がした。ルコはそのまま席に着く。
「でさ、話それちまったけど、そのミナミヨウコはＬ４のフドウアキラとつきあってたらしぃわけ、いや別れてはいるんだけどね。それで内紛状態らしいでっせ」
「ふうん。まっ俺には関係ないや」担任が入ってきて会話は中断された。
そして昼休み。嫌な予感は的中した。
いつもの場所。人気のない（しっかし、ニンキとも読めるしややこしい。この場合はヒトケ）焼却炉の前。で俺とルコは会った。ここは俺とルコのいわば秘密の場所で、つきあう前、掃除の時間にゴミ捨てに一緒に行ったとき他愛もない話をした場所で、昼休みは2人でここで過ごすことが多い。もう、ルコは来ていた。
「よう」

「う、うん」
なんだこの違和感。まるで別れ話でも始めそうな彼女のテンションに・・・。まさか。
「ん。どうした。クリスマスの予定でも決める？お台場ってベタかな」
うわー。我ながらベタな展開にもっていこうとしている。別れ話を切り出そうとする彼女とそれをはぐらかそうと明るく振舞う彼。の構図だ。
「あのね・・・」
「なに？」
「私、他に好きな人ができたの」

わ。俺、だっせえ。
それからのことはあまり覚えていなくて、学校もいつのまにか終わり、俺は理容ナカニシの前まで決めていた。悲しいかな、髪を切るという比較的どうでもいいことは覚えている。

「いらっしゃい。どうした？浮かない顔して」
「察してくれたか。おやっさん。とりあえず坊主」
「ほんとに？」
「ゴメン。嘘。でも短くしてえな。スピードの時のキアヌ・リーブスみたいなオサレ坊主に」
「ははあ、さては失恋したな」
「まあね」
「俺もよくフラれてたなあ。数えると高校の時だけで9人か。一学期に平均一人だなわけだ。まあ今となっては懐かしいな。まず最初はヒトミちゃんだろ、んで次はユカちゃん、マユミちゃん・・・・」

髪を切っているあいだ俺はナカニシのおっちゃんの恋愛話9人全てを聞くはめになった。

「ハイ。おしまい。まあ元気だせよ」
「まあ、ね。はい1万円から」
「あいよ」

自分の携帯がなった。着メロはパターン1のままだ。母親からだった。

「もしもし」
「トオル！今どこ？」
「どこって髪切ったとこだよ。今から帰る」
「おばあちゃんが！」

母親は涙声だった。なんだこの胸騒ぎ。

「どうしたんだよ、おばあちゃんが」
「く、車にひかれて、今病院に運ばれて」

俺は病院の場所を聞いた。
電話での会話を聞いていたおやっさんは心配そうな顔で俺にお釣りを渡す。

「大丈夫か？」
「うん、とりあえず病院いってくる」

俺は店を飛び出し、大通りに出た。タクシーをとめる。

「フドウ総合病院まで」

運転手にそう告げる。クソッ。髪を切ったお釣りのおかげでタクシーで行けるなんて。あの1万円に意味があったようにも思われて俺はなんだか嫌な気分がした。その時、俺は自分がなにか光りに包まれるような感覚に襲われた。思わず目をつぶる。なんだこれ。頭の中で様々な場面がよぎり始める。これがフラッシュ・バックってやつか。どこかの交差点。いや見覚えがある。どこだ？次に見えたのはポスト。そして自分に向かって走ってくる白いワゴン車、ナンバーは・・・。わからない。車はドンドン近づいてくる。わわ。ぶつかる。俺は目をつぶろうと・・・。

あれ、俺、目つぶっていなかったっけ。
そこで目が覚めた。俺は自分の部屋のベッドの上にいた。目覚ましが鳴っている。

「なんだ夢かよ。夢にしては長いし、リアルだし」

俺は苦笑いしてベルをとめようと目覚まし時計に手を伸ばした・・・。手が目覚まし時計にあたり時計は床に落ちる。あれ、デジャブ。俺は床を見下ろした。目覚まし時計は単3電池を2本吐き出していた。とっさに俺は頭に手をやる。

「嘘だろ」

確かに切ったはずの髪をつかんで俺は言った。

第3話「トゥー・ユア・タウン」

２００５年１２月１日木曜日ＡＭ：０７：２２（２回目）

「嘘だろ」俺は思わず飛び起きていた。

昨日と全く同じ状態で目覚めるなんて。いや、もしさっきまでのことが夢なり、タクシーで気を失って目覚めたりなりだったら今日は１２月２日のハズだ。俺は枕元に置いている充電中の携帯を見た。

「嘘だろ」２回目だ。

携帯の時計は１２月１日の７時２３分を表示している。新着メールのマークが点滅していた。普段は通学途中にやるが、俺は迷わずメール画面を開いた。

やっぱり。ルコからのメールをみる。

『今日、昼休みにいつもの場所でね。』

「一日を繰り返そうとしてるのか」なんとなくつぶやく。ということは、俺はもう一度フラれ、髪を切り、母さんの電話で・・・。そうだ。

「ばあちゃん！」

俺は飛び起きて自分の部屋へ出て、急いで居間へ向かった。

「母さん！ばあちゃんは！」

「何よアンタ、着替えもしないで。おばあちゃんは散歩です」

「そっか、そうだった。いつもの散歩コースだよね」
「多分そうだけど、どうしたの？」
「ちょ、会ってくる」
「何、言ってんの、学校は？」
「遅れて行くよ！」俺は寝間着のジャージのまま、玄関に向かった。
そしてあることを思い出した。
「何かに使うかもしんないから」と母親に近づきエプロンのポケットに手を突っ込む。
「何、何？」

1万円札を取り出すと、ヒラヒラさせて

「髪も切らなきゃいけないしね」
「アンタ、なんで知ってんのよ！」

2人のやりとりをキョトンとして見ていた妹のハリコを見て俺はまた思い出していた。

「ハリコ」
「何？」
「オンミョウジだけどな、アイツはやめとけ、最近彼女にフラれたらしいけど、今2年のスッゲエカワイイ子狙ってるらしい。3位のお前じゃかなわないよ」
「ちょっと何勝手な事言ってんの！」
「いいから、いいから」

俺は家を飛び出していた。なんとかおばあちゃんを救わなければ。これは神様か誰かが与えてくれたチャンスに違いない。俺はおばあちゃんの散歩コースになっている近所の公園へ向かった。息を切らせながら、公園に入るとおばあちゃんはベンチで休んでいた。

「ばあちゃん！」
「おや。トオル。どうしたんだい？学校は？」
「いや、そんなことよりさ」クソッ。どう説明すればいいんだ？
「なんか嫌な夢見たんだ。ばあちゃんが車に轢かれる夢」
「おやおや、それはホントに嫌だねえ」
「今日の予定は？えっと俺が髪を切ってたのが４時ごろだから・・・。とにかく、夕方は何してんの？」
「今日の夕方かい？さあて何しようかね。そうだ。今日はカルチャースクールの日だよ。ほらこないだ見せたあの絵手紙」
「何時から？俺ついてくよ。いや、できれば家から出ないほうがいい。一歩も」
「何だい？何をそんなに」
「いいから！孫の言うことを聞いて」
「わかったよ。その変りアンタも学校行くんだよ」
「そんな！今日は休む。ばあちゃんの側にいるよ」
「アンタ何を言ってんだい。おかしな子だねえ。孫にみてもらうほど弱っちゃいないよ」
「そういう問題じゃなくて」
「アンタは学校。あたしゃ家。いい？わかった？」
「わかったよ」

俺はとりあえず学校に行くことにした。まだ時間はある。離れているのはツライが、事故までまだ時間はあるし、おばあちゃんさえ約束を守れば事故は起きない。俺は家へ戻って、母親に朝のことを問い詰められつつ、１万円は返さず制服に着替えて学校へ向かった。教室へ着くともう１時間目が終わり、１０分の休み時間だった。リンジが俺をみつけるなり話かけてきた。

「いよ！トゥル君」

「・・・・」
「どした。どした。なんで遅れたの？でハリコちゃんは元気？」
「・・・・」
「なになにその不機嫌さ加減。なにかぁ。あったぁ。系？」
「おまえな、そのしゃべりかた・・・。もういいや。殺意覚えるから。以上」
「だー。もう。わかったよ。で、どうしたの。大丈夫だってハリコちゃんを狙うのは、お前の妹だと知った時点であきらめた俺が聞いてやるよ」
「オンミョウジ先輩に気があるならやめとけって言ったよ。彼女にフラれたけど、今、狙ってる子がいるぞって」
「そういう噂聞いたな。お前誰から聞いた？」
「お前からだよ」
「えっ俺、言ったっけ」

俺はその質問を無視して席に座って本を読んでいるルコを見た。目が合う。俺は笑った。作り笑いになってしまう自分が悲しい。そして向こうも作り笑い。はぁ。俺はこれからフラれるのか。どうにかできないもんか。おばあちゃんの死を回避したように失恋も回避したいもんだ。
昼休み。俺はいつもの場所に行った。今日は。いや、２回目は俺が先に来ていた。
そして、考え事をしていた。失恋も回避したいが、やはりおばあちゃんが気になる。タクシーの中で俺はある景色を見た。交差点が見えた。どこかで見覚えがある。どこだっけ。ええと。そうだ。家の近所のあの少し狭くて車の通りが少ないあそこだ。めったに車は通らないがあそこで事故にあったのか？そしてポスト。何を意味する？あの辺にポストはなかったが周りの景色はどこか見覚えがあった。白い車。あれに轢かれたのか？待てよ。カルチャースクールの帰りなら、あの交差点は通らないはずだ。じゃあ、なぜあの道を？どう

もひっかかる。ルコが来た。

「よう」

「う、うん」

ヤバイ。またこの空気を味あうとは。

「あのね・・・」

「好きな人できたんだろ？」

「へ？」

「なんかそういう感じしたんだよなあ。いやさ、実は俺も好きな人できてさ。まあ、これで俺達おしまいだな」

自分の失敗で別れが来たのなら建て直しもきくだろうが、他に好きな人ができたのならしょうがない。例え1日を繰り返すことができたとしても、結果は同じだ。それが俺が短い時間で出した答えだった。ならば自分から別れ話を出すまでだ。それが自分の運命に対する精一杯の抵抗だった。しかし、おばあちゃんの運命は何としてでも変えねば。

「わ、わかった。お互いの恋がんばろうね」

「おう。じゃ、俺行くわ」

俺は携帯を取り出して家に電話した。頼むばあちゃん出てくれ。クソッ。出ない。

母親の携帯に電話する。こちらも電源を切っている。クソッ。胸騒ぎ過ぎ。

それからも電話するが、誰も出ない。学校も終わり、帰りながら電話しているとようやく家電に母親が出た。

「母さん！」

「どうしたの」

「携帯にも電話したんだぜ」
「パート中は電源切ってるの。あら、まだ切ったまま。ハイ。今電源入れたわよ」
「もういいよ。ばあちゃんは？」
「カルチャースクールは休むって言ってたけど家にはいないわよ」
「どこ！」
「そんなのわかんないわよ。母さんだって今ちょうど帰ってきて慌てて電話とったんだから・・・。あっ。書置きしてる。『今日中に出さなきゃいけないハガキがあるから郵便局へ行きます』どうせいつもの懸賞ので・・・」

俺は電話を切っていた。クソっ。気づかなかった。あのポストは郵便局前のやつじゃないか。郵便局へ行く道ならあの交差点を通る。俺は時計を見た。3時半。まだ間に合う。俺は郵便局へ向かった。郵便局のポストを見てるということは、郵便局には行っている。いや、ならば交差点で待っていた方が・・・。待てよ。そもそも轢かれたのはあの交差点だったのか。俺はもう1度あのフラッシュ・バックを思い出していた。白い車が迫ってきた時・・・。クソッ。思い出せ。看板。そうだ看板が見えた。パチンコ屋の・・・。あれは例の交差点の道のうち郵便局に向かって突き当たる大通りにあるパチンコ屋だ。そして郵便局は通りの向かい側にある。俺はとにかく急いだ。

第4話「ユア・ワールド」

「ばあちゃん！」

俺は郵便局前のポストにいるおばあちゃんを掴まえることができた。

「トオル？どうしたんだい？」

「はぁ、はぁ、家から出るなっつったろ」

「でもね。消印が今日まで有効だからさ、健康ドリンクの懸賞」

「バッカ。死んだら健康もクソもねえだろ」

「何を言ってるんだかねえ」

俺はさっき渡ってきた大通りを眺めた。おそらく、ばあちゃんはこの後白い車に轢かれるに違いない。

「なあ、これからどっかいかね？喉渇いたなあ。そうだ喫茶富士子。あそこのミルクセーキは冬でも飲みたくなるんだよなあ」

「それもいいねえ。でもほら」

ばあちゃんは横断歩道のすぐそばにある自動販売機の前を指差した。

「あんたがすきなペプシコーラ買って帰ろうかと思ってたからね」

ばあちゃんに付き添いつつ自販機の前まで行く。多分横断歩道を渡っているときに轢かれたはずだからここで少し時間潰して、白い車をやりすごす。ばあちゃんは自販機機に金を入れ始めた。

「えーっとどれだっけねえ。アンタが好きなのは」

「これこれ、ダイエットペプシ」

「ああ、そうだった」

俺は信号機の方をチラリとみた。パチンコ屋の看板が目に入る。あれ、この景色前にも見たことが・・・。俺はあの時のフラッシュバックを思い出していた。あの白い車が突っ込んでくるときに見た景色はまさにこの自販機前からのものだった。そして信号は赤なのにスピードを落とさない白い車は目に入った。

「ばあちゃん！」

俺はばあちゃんの手を引いて抱きかかえるように思いっきり横に吹っ飛んだ。

キキー。大きなブレーキ音とともにその白い車はガードレールを突っ切って、さっきまでふたりがいた自販機に突っ込んでいた。もう、それはスローモーションだった。しばらくボーっとしていたが周りに人だかりができ始め、携帯で救急車を呼び始めたスーツの男の手を借りて立ちあがることができた。

「ばあちゃん。俺にジュースを買おうとしたばっかりに車に轢かれたんだね」

「何いってんだい、助けてくれたじゃないか」

泣きじゃくる俺にばあちゃんは優しく声をかけてくれた。警察官が近づいてくる。

事情聴取みたいなことが終わると、俺は警察官に聞いてみた。

「あの、車の運転手は？」

「ああ、無事だったみたいだよ。まだ詳しくはわからないけど居眠り運転じゃないかな」

「そうですか・・・」

もしかしたら彼は人を殺してしまったという事実に悩まされたかもしれない。しかし、それさえも救うことができた。

「じゃ、気をつけて帰って」

警官は去っていく。こんなに簡単な聴取でいいのか。ま、いっか。俺たちは無事に帰宅した。

「あんた！髪切ってないじゃないの！」

母親は怒ったが埃だらけの俺の制服姿にすぐ気づいた。

「いや、それどころじゃなくてさ」

俺は事情を説明した。

「まっそういことで」

「へえ、アンタもたまには役に立つもんね」

「うるせえ」

「お兄ちゃん見直した～」妹が目を丸くして言った。

「まあな」

それをばあちゃんは優しい目で見てくれていた。

「飯食ったら髪切りいくよ」理容ナカニシは深夜１２時までの営業です。

９時頃理容ナカニシへ行く。俺はニヤニヤしながら店へ入った。

「なんだ？お前」ナカニシのおっちゃんは不思議そうな顔をした。

「おやっさ～ん。おもろい話があるんだけど」

「なんだ？」
「とりあえず髪切ってから、とっておきだよ。まずは彼女にフラれた。いやフラれた話から。あっそれ踏まえたうえでスピードの時のキアヌ・リーブスみたいな感じね」
「なんだ？暗い話題のくせにやけに明るいな」
「まあね」
「で、なんだ。おもろい話って」

1万円からのお釣りを渡しながらおっちゃんは聞いてきた。

「信じてくれんのかね～。あっそうだ。おやっさんの学生時代の恋バナから言っちゃおうかなあ。2回目の今日はその話でなかったもんなあ」
「なんだそれ？」

携帯が鳴る。無論、パターン1だ。

「あ、母さんからだ、ちょい待って」電話に出る。
「もしもし。どうした」
「トオル、トオルおばあちゃんが、おばあちゃんが」
「な、なんだよ」嫌な汗が出てくるのを感じた。
「バイクに轢かれて今病院に・・・」
「なっ。嘘だろ」
「とにかく病院に・・・。せっかくあんたがさっき助けたのに」
「わかった。泣くなよ。今から行くよ。フドウ病院だろ」
「あんたなんで・・・」
「なんとなく。だよ」俺は電話を切った。
「大丈夫か？」おやっさんが不安そうに聞いてきた。そう、1回目の今日のように。
「大丈夫じゃ、ないかも。おやっさん話は後で。暗い話しになっち

まうかも。いや、まだチャンスはあるはずだ！」

キョトンとしたおやっさんを後に俺は店を飛び出した。
タクシーを止める。タクシーに乗っているときに俺はまた今日の朝に戻れた。
もしかしたら、またタクシーに乗ればなんとかなるかもしれない。

「フドウ病院まで」

しかし、無情にもタクシーは俺を病院まで運んだ。

第5話「オーバー・ザ・ナイト」

病院に到着したとき、家族は全員揃っていた。手術中の赤いランプが目に入る。ドラマと同じだ。

「で、ばあちゃんは？」

「まだ、なんともいえない」オヤジが絶望を絵に描いたような顔で答えた。

「クソっ、俺が俺が助けたのに、いったい何があったんだ？」

「おばあちゃんに電話があったの」今度は母が答えた。妹のハリコは泣きじゃくっていた。

「誰から？」

「わからない、おばあちゃんが出たから・・・。その後、友達が近くまで来てるからって。こんな遅くに。って言ったんだけど、どうしても。って・・・」

まるで自分が悪いかのように母は話した。

「それで」

「警察から電話があって・・・。目撃者によるとバイクに轢かれたって・・・」

バイク？今度はバイクか？なぜ？運命は変えられないのか？

「轢いたやつは？」

「ひき逃げらしい」怒りをあらわにしてオヤジが言った。

「ちくしょう」手術中のランプが消えた。医者やら看護師やらが出てくる。

俺達家族の前に来ると医者は言った。

「最善は尽くしたのですが・・・」ほんとドラマみたいだ。

両親がいろいろと手続きしている間。ロビーで妹とベンチに座ってボーっとしていると人が近づいてくる気配がした。見上げるとＬ４のひとり「フドウアキラ」だった。面識はほぼなかったが、顔はしっていたし、隣りのクラスでオンミョウジ絡みで一度くらいしゃべったことがある。気がする。

「どうも、あの、俺、偶然事故を目撃して、救急車呼んで父さんの病院に連れていってもらったんだ。ここが近くだったし」

ここで俺は病院名がフドウだったこと、フドウアキラの金持ち理由が「親が医者」というのを同時に思い出していた。

「あ、そうなんすか、それはどうも」

まあ、あたりさわりのないことを言っておこう、と思いつつ目撃者というのがひっかかった。

「あの、バイクって聞いたんすけど」

「ああ、暗いからよくわからなかったけど、フルフェイスのヘルメットに赤っぽい色だった。ナンバーは残念ながら見ていないけど・・・。轢いた後こけてたけどすぐ立ち上がって走りさったから」

「そうですか、ありがとうございました」

「いや、俺は、それに」

そう、ばあちゃんは死んだ。しかも、俺が一度救ったのに。神様はチャンスをくれたんじゃなかったのか。

両親が来たのでフドウとはそこで別れた。

家に帰ると俺は理容ナカニシに向かった。もうしまっているかもしれないが、話さずにはいられない。ナカニシは看板こそ閉まってい

たが明かりはついていた。もう夜中の2時だというのに。まるで俺をまっていかのようだった。店に入るとおっちゃんは俺の表情で悟ったか、無言でうなずいただけだった。俺は全てを話すことにした。

「1日を繰り返すか」話を聞いたおっちゃんは神妙な顔をして言った。

「そう。信じられないだろ。俺だって」

「でも、誰にも話したことがない失恋記録の話をしっているしな。信じるよ」

信じてもらおうと失恋記録の話をしたときおっちゃんは「誰から聞いた」のイッテンバリだったが。

「でもさ、今度はもう繰り返されないんだ。あれはなんだったんだろう」

「実はなおもいあたるんだ、その話」

「へ？」

「流行りの海外ドラマに似ているんだよ。俺はみたことないけど」

海外ドラマなんてジェシカおばさんの事件簿ぐらいしかわからない。って俺って18って設定だよな。

「海外ドラマ？」

「そう。そのドラマは主人公は死者から『助けて』と呼ばれると1日を繰り返すんだが」

「俺、ばあちゃんの声なんて聞いてないよ」

「お客に詳しいやついるから今度聞いておくよ」

「うん。つうか見てみようかな。それってなんてタイトル」

「トゥルー・コーリングだよ」

俺はリンジが俺のことを「トォル」と呼んでいたことを思い出していた。

第6話「ネクスト・ラスト・シーン」

２００５年１２月８日木曜日ＡＭ：０７：２３

あれから1週間がたった。俺はとりあえず「トゥルー・コーリング」を借りて全部観た。中途半端な終わり方に驚いたが、なるほど、俺の体験に似ている。どうやらあの日俺とは別の人間がおばあちゃんが死んだ直後、死んだはずのおばあちゃんの「助けて」という言葉を聞いたようだ。

同じ能力を持つ俺は同時に1日を繰り返したというわけだ。片方が「声」を聞いた場合はもう片方はその人が死んだ過程をフラッシュバックで見ることができる。タクシーに乗った途端俺が体験したのがそれだ。そして考えられることはただひとつ。「声」を聞いたヤツがおばあちゃんを殺したということだ。

理由は定かではないが、トゥルー・コーリングの理論でいえば「死ぬべき人間を助ける必要はない」ということだ。俺から言わせればそんな能力があるということは「助けるべきだ」ということ。たとえ身内じゃなくとも。

そろそろ目覚まし消すか。手を伸ばす。目覚ましの隣りにあるキム・ポッシブルのフィギア（マックのハッピーセットのヤツ）が床に落ちた。とりあえず拾いあげる。カーテンを開けるとどんよりしたくもりだった。嫌な予感がしたが、おばあちゃんが死に、フラれた俺にこれ以上の不幸は訪れないだろう。と、そのときはそう思えた。

制服に着替えて1階へ降りる。

「おはよう。母さんツナくれ。ツナ」

「はいはい」

トーストにツナマヨをつけてほおばる。ンマイ。

「お兄ちゃんいつもギリギリだね」
妹のハリコがソファーでテレビを見ていた。
「あん。まあ目覚ましもギリギリにしてるしな」
「お兄ちゃん蟹座1位だよ！」

スルーかよ。

「どうしても助けたいと思える出会いアリ。だって」
「あっそ。お前はどうなんだ？」
「天秤座は5位だよ。恋愛運も不調みたい」
「おま、まだオンミョウジ先輩狙ってんの？」
「そんな、ただ・・」

ハリコはしまったという顔をした。

「なんだ言えよ」
「メルアド交換しちゃった」

うわー。恋してる顔じゃん。

「おま、いつのまに。まっいいか。遊ばれんじゃねえぞ」
「オンミョウジ先輩はそういう人じゃないもん」

どうだか。俺はどうも苦手だ。

「先いくぞ。たまには一緒に行くか？」
「やだ」

そんなに即答せんでも。

「イテキマース」とたらちゃん風に言って俺は家を出た。

メールチェック。彼女がいなくなった今、あんまり必要ない感じもするが、ルコとは今でも普通に話するし特に気まずくもない。他にできた好きな人っつうのも気になるが聞けるわけもなく、俺も好きな人ができたっつう設定なのだが向こうも聞いてこない。まっ当たり前か。

特に気にするメールもなく、学校近くのコンビニにさしかかる。倒れている自転車と格闘している同じ学校の制服をきた女の子が目に入った。

「どうしても助けたいと思える出会いか・・・」

占いなんて本気にしないが、見過ごすわけには行くまい。

「大丈夫すか？」声をかえると、女の子は振り返った。

わーお。ミス・プウリングルスのミナミヨウコだ。

「ええ」

「カバンの中身もぶちまけちゃってんじゃん」

足元のカバンを拾おうとするとした俺は教科書やらノートやらにまぎれてなにか茶色い封筒があるのが見えた。がそのことに気付いた彼女は真っ先にそれを拾い集めた。そしてあんなに手間取っていたのに自転車をいっきに起こすと、「どうも」といって学校の方角とは逆の方へさっていった。どこへ行く気だ？とクエスチョンマークを残しつつ、俺は彼女の背中を見送った。そのとき俺はミナミヨウコを「どうしても助けたくなる」ことになろうとは思いもしなかった。

第7話「サイレント・サイレン」

教室につくとリンジが話かけてきた。

「ヨウ！トオルちゃん。どうよ。最近」

「昨日も会ったじゃねえか」

「チゲーよハリコちゃんだよ」

「・・・・」

「・・・・。じゃねーよ」

俺はオンミョウジの方をチラリと見た。

「オンミョウジさんとメルアド交換したってさ」

「マジでか！ちょ、本人に聞いてこようぜ」

「バカ！いいよ。別に」

「お前な。もしかしたら将来。お前の弟・・・。待てよ」

「何だよ」

「玉の輿じゃーん。便乗玉の輿。お前も恩恵うけちゃえそうだな」

「どんだけ話飛躍させてんだ」

「まあ、俺も相手がオンミョウジならあきらめるよ」

「あれ、ハリコが俺の妹だと知った時点であきらめたんだろ」

「まーねー。でも、お前に彼女いるのか聞くぐらいだからハリコちゃんは本気なのね」

俺はその時、なにかしらの違和感を覚えたが、思い出す前に教室に先生が入ってきてＨＲが始まってしまった。

「それじゃあ、ＨＲはコレで終わり。あっそうだ。田所」

「ハイ」

「ちょっとお前に頼みあるから昼休み職員室来てくれ」
「ハイ」
先生が教室を出て行くと、またクラスはガヤガヤ。となった。
「オイ、トゥル君」リンジが話かけてきた。
「なんだよ」
「おまえなんか。やらかしたのか」
「ちげーよ。多分俺になら雑用頼みやすいからだろ」
「ふーん」
昼休み。職員室へ行くと先生は弁当を食いながら俺に書類が入った封筒を
渡してきた。
「コレ、地府星大学の紺染教授に渡してきてくれないか。先方にはお前が
行くと伝えておいたから」
地府星大学は風鈴具流須高校の近所にある、そこそこのレベルの大学で、ウチのクラスの何人かも目指している。
「いいですよ」
といいつつも、近くなんだから先生行けよ。と思った。
のを察したのか、
「ちょっと俺用事があってなあ。お前、家も近所だろ」
ハイハイ。

「教授がいなくてもポストに入れておけばいいから」
「わかりました」
「あと、あそこのロッカー片付けといてくれよ」
と職員室の隅にあった3段のロッカーを指差した。廊下に並んでいるやつと同じだ。
「もうボロボロでね。ゴミ置き場に持っていっておいてくれ。オイ、君」先生はそこらへんにいた生徒をつかまえた。

「君、名前は」
「センマルです」
「じゃあ、彼と一緒に」
「ハイ」

ハイハイ。

が、俺は家に帰ってから気付いた。というか思い出した。封筒に。しかも夕飯食って、風呂上りに。時計を見るともう9時を回っていた。

「やっべ」

しかし、ポストに入れておけばいいのだ。大学までは歩いて２０分。

「しょうがねえな。行くか」

俺はジャージのまま家を出た。

大学の校門まで行くともちろん門は閉まっていた。ポストって門にあるポストでいいのかな。とそんなことを考えていたら守衛所のお

じさんに声をかけられた。俺はココへ来た理由を説明する。
「そうかあ。えっと教授がいる建物はねえ・・・」
どうやらそこに、教授個人のポストがあるらしい。
「そうだ、おじさんが持っていくよ。もうすぐ、見回りの時間だし」
「あっ。助かります」
その時「キャー」という叫び声がした。
そして、ドサッ。いやドコッ。
そんな音がした。
俺と守衛のおじさんは二人して音がした方をみる。
「な、なんですかね」
「よく学生がサークルの部室で飲み会やってるんだよ」
「それにしては尋常じゃない、声でしたよ」
「そ、そうか」
ぶっちゃけ二人とも嫌な予感がしていた。
「とりあえず、見にいくか」
「じゃ、僕はこれで封筒よろしくお願いしますね」
「オイオイ」
「じょ、冗談ですよ。ついていきます。つうか、ついてきて」
俺は走り出した。こっからはマジメに。
数十メートル走ると十字路みたいになっていた。
声がした方で判断すると右だった。

数メートル走る。

「どこだ？」

振り返ると守衛のおじさんが

「コッチだあよ！」

と叫んでいた。

俺は通り過ぎていたが建物と、建物の間にさらに道があったのだ。

人が倒れていた。

おじさんが先に声をかける。

女性だった。いや、知ってる顔だ。

俺が声に出そうとしたら、

「この子は・・・」

カタヒザをついて抱きかかえるようにしておじさんが意識があるか確認していた。反応はない。

「おっさん！この子知ってるの？」

「ああ、さっき2号館の場所を聞いてきた子だ。ウチの学生だと思うが・・・」

「おっさん、ここの学生ならわざわざ2号館の場所聞くかい？」

気分は工藤新一。おっちゃんなら金田一一か。

「じゃ、じゃあ。この子は？」

「俺と同じ高校だよ」

「こ、高校生？」

確かに「ミナミヨウコ」の顔は大人びている。
化粧のせいもあるが。朝あったときと印象が少し違うのはそのせいだ。
俺もしゃがみこんでいて顔を覗き込む。
息はしていないようだ。

「ヤバイな」
「と、とりあえず、救急車・・・」
「おっさん俺の携帯ー」

走り出したおっちゃんには聞えなかったようだ。
俺は上を見上げた。両隣の建物は同じくらいの高さで5階建てだった。
周りにも屋上にも人影はない。

「あの高さから落ちたのか？」
後頭部に置いていた手が血まみれになっているのに気がついた。

「設定的に後頭部打撲でオーケイなのか？」

と作者に文句をたれる。
まあいい。彼女はまったく動かない。
脈をみる。かなり弱い。
だんだん弱くなっている。

「電話してきたよ～」

おっさんが帰ってきた。

「１０分ぐらいで着くって」
「ちょっ、おっつぁん変わって」
俺は立ち上がった。
「誰かいないか、ちょっとみてくる」
「まさか、」
「２号館の場所を聞いてきたってことは誰かと待ち合わせした可能性がある」
ホント気分は名探偵。
「おっさん２号館はどっち？」
俺は走り出そうとしていた。
「ね、ねえ脈がないよ！」
「そんなバカなさっきまで・・・」
「助けて」
確かに聞こえた。
「ほら今、しゃべった」
「え、え、何も言ってないって」
「助けて」

「ほら、だから助けてって・・・」まさか。
俺は「ミナミヨウコ」にかけよった。
「オイ」
「助けて」
「オイなんだよ」彼女の顔を覗き込む。
彼女は再び言った。
「助けて」
目を見開いて。確かに俺を見た。
ピピッピピッ。目覚ましがなっていた。条件反射というものなのか。手を伸ばす。が、キム・ポッシブルのフィギアを落としていた。ん。この感じ。まさか。飛び起きて携帯を確認する。２００５年１２月８日木曜日の朝７時２３分だった。
「また、繰り返し・・・」
しかも今度は確実に「助け」を求められている。
この一週間ずっと「おばあちゃんが僕に助けを求めていてくれたら」と何度も思った。今すべきことはただひとつだ。彼女、ミナミヨウコを助けねば。

第8話「リターン・リターン」

２００５年１２月８日木曜日ＡＭ：０７：２３（２回目）

「マジ・・・かよ」

もう１度、俺はこの日を繰り返すことになった。しかも、今度は助けを求められた方だ。ミナミヨウコ・・・。彼女のために今日１日費やさねばならない。

携帯の時計をみる。

「タイム・リミットは９時半か・・・」

とにかく学校へ行ってミナミヨウコに会わなくてはいけない。そこで俺は思い出した。コンビニだ。朝コンビニで会ったんだっけ。とにかくあの後、どこへ行ったか見極めなければいけない。俺は制服に着替えて、居間へ向かった。

「おはよう、母さんツナ・・・。やっぱりいらねえや。学校行く」

「あら、早いのね」

「俺にしては。だろ。ちょっとね」

「そうそう、お兄ちゃんいっつもギリギリだもんね」

ルコは１回目の今日と同じくソファーでテレビを見ていた。当たり前か。

「お兄ちゃん蟹座１位だよ！」

知ってるっつうの。

「お前も恋愛運不調なら気をつけろよ。メルアド交換ぐらいで舞い上がってんじゃねえぞ」
「な、なんで知ってるの！」
「さあね。どうせ一緒に行かねえだろ、先いくぞ、イテキマース」
俺は玄関を出ると駆け出していた。急がねば。あのコンビニへ。
コンビニの前に着いた。急いだおかげかミナミヨウコはちょうど自転車を倒したところだった。俺は急いで彼女のもとに駆け寄って一緒にぶちまけた荷物を拾う。
「大丈夫？」
「あ、大丈夫です」
俺は彼女をマジマジとみつめた。確かにこのコは今日死ぬハズなのだ・・・。
それとは別に俺は彼女の美しさにみとれてもいた。
いいかげん、俺の視線に気がついた彼女は怪訝な顔をして
「なにか？」
と聞いてきた。
「いや、別に、あのその、君、今、悩みごとない？」
「は？」
「いや、そうだ。コレ」
俺は「もうひとつの今日」で気になっていた茶色い封筒を拾い上げる。その感触は・・・。どうやらお金っぽい。

「何言ってんの？アンタ？」

アンタって。どうか彼女がツンデレキャラでありますように。
彼女は俺から封筒を奪いとると、そそくさと残りの荷物を拾いあげる。

「じゃ、どうも。一応例は言っておくわ」

彼女は自転車に乗り去っていこうとする。もちろん行き先は学校とは逆方向だ。

「ねえ。ちょっと。待ってよ！」

俺は追いかけた。が気が付かれないようにしなければいけない。
徒歩（まあ走ってるけども）ＶＳチャリ。

「大変な尾行ですなあ」

そんなことをつぶやきながら俺は彼女が角を右に曲がるのを確認した。

５分ぐらいはなんとか姿を追えていただろうか。俺は彼女を見失っていた。

ちくしょう。

立ち止まり、息を整えていると小さな公園のトイレの影に人影を発見した。
ウチの学校の制服の男女２人。だ。一人はミナミヨウコ。もうひと

りは彼女の影で見えない。
俺はトイレの反対側から周り、会話を聞くことにした。
「ハイ、コレ約束の・・・」
「いやあ、悪いね」
「あなたの家お金持ちなんでしょこんなハシタガネ、いらないんじゃない？」
「おいおい。金持ちとはいえお小遣いは決まってるんだぜ。手に入るモノはもらっておかないと」
この声、聞いたことがある。
「それで。渡してくれるの例の」
「メモリースティックだろ」
「そう」
「でもさあ、今こんなんいくらでもコピーできるんだよねえ。一昔前のドラマとかならネガさえ手に入ればいいんだろうけど」
ネガだけだって？昔の時代だってコピーはいくらでもできたハズだぜ。
あんたドラマの見すぎだよ。
俺は心の中でツッコンだ。
声の主である「フドウアキラ」に。
コイツが絡んでいやがったか。
俺のばあちゃんの事故を目撃した男。これが何か関係している・・・のか？
「だっからさあ。まだまだお金持ってきてくんない？」

「そ、そんな。コレで最後って・・・」
「ま、このメモリースティックはあげるよ。じゃあ、サービスで教えてあげよう。メモリースティックはもうひとつある。そのもうひとつだけ。だよ」

「返してよ」
「そいつはどうかなあ。まっまた連絡するよ。今夜かもしんない」

今夜・・・。やっぱりヤツは怪しい。クソ、病院ではいいヤツそうだったのに。

「じゃあねえ。学校で」
フドウアキラの立ち去る気配。
ため息をつくミナミヨウコ。

携帯の時計をみる。俺も学校行かないと。

タイムリミットまであと12時間半。

学校どころではない気もするが、とにかく彼女がいる場所に行かねば

第9話「トゥエンティ・フォー」

「お母さんさんねえ、おじいちゃんから聞いて忘れらない話があるの」
「なんだい？」
「おばあちゃんとの馴れ初めよ」
「それが？」
「おじいちゃんはね、おばあちゃんに命を助けられたから結婚したんだって」
「なんだよ、ソレ。それが出会いってこと？」
「さあ、でもおじいちゃんは言っていたのよ。ばあちゃんはまるで自分が死ぬのがわかっていたみたいだったって」
「ふーん」

「ねーばあちゃん」
「なんだいトオル」
「母さんから聞いたけど、おじいちゃんの命を救ったんだって」
「ああ。まあね。事故に遭いそうだったのをね・・・。さすがに病気は治せないからねえ。今回はどうにもできなかったよ・・・」
「ねえ、ばあちゃんはなんでその時助けることができたんだい？じいちゃんは事故に遭うのをばあちゃんが知ってたって言ってたんでしょ」
「さあね。昔のことだから忘れたよ」
「そっか。じいちゃんいなくなって寂しいな」
「あたしもはやくじいちゃんのところへ行きたいよ」
「何言ってんだよ。ばあちゃんに何かあったときは俺が助けるよ。なんとしてでも」
「ありがたいねえ。ありがとうトオル」

俺が中3の時、じいちゃんが死んだ日の夜の会話だ。その3年後。
俺はばあちゃんを1度守ることができたが結局、じいちゃんのところにいかせてしまった。

俺が変な能力を身につけた日、もちろんこの会話のことが心の片隅にあった。
ばあちゃんは、もしかしてこの能力を持っていたのではないか。
死者の声を聞き、1日を繰り返す。という能力を。
そして、死を免れた日にかかってきた電話。
電話をかけてきたものはその能力を知るものではないのか。
果たしてそれは誰か？
そしてソイツは「死ぬべき運命にあるものは死ななければいけない」という信条のもと、ばあちゃんを殺した。

そして・・・。次はミナミヨウコ。今度は俺が助けを聞いた。ということは、
ばあちゃんの助けを聞いたものが、あのフラッシュバックを経験したということになる。それをモトにそいつはミナミヨウコの命を狙うハズだ。

待てよ。ミナミヨウコは何らかの事情で、地府星大学の2号館から落ちた。
落とされた。かもしれないが。ということは、ミナミヨウコは今、2つの危険にさらされているということになる。

もともとの運命と、運命を確実にしようとするもの。

そして俺がその運命を阻止しようとするもの。か。

そんなことを考えながら、俺は学校に向かっていた。

タイムリミットは今日の9時半。まてよ、要はミナミヨウコが死ねばいいから、彼女は今日。常に危険なのか・・・。ああ、めんどくせえ。

とにかくなんか情報を集めるかそれともミナミヨウコを見張っておくか・・・。

駐輪場につく、自転車を停めると、ちょどミナミヨウコも自転車を停めていた。
少し探るか・・・。

「さっきは、どうも。大丈夫だった?」

ミナミヨウコは一瞬キョトンとした。そりゃあ、そこにでもいるような顔の俺なんて・・・。

「ああ、自転車の。どうも」

やっぱりそっけない。

「ねえ、ホントになんか困りごとないかい?俺でよければなんか相談にのるよ」

ありえない。ほぼ初対面同士の会話じゃない。

「いや、いいです」

何言ってんだコイツ。って顔だ。ちょっと動揺させてみるか。

「あの写真のコトなんだけど」

彼女の顔色があきらかに変わった。しかし俺をキッと睨むと

「あなたもアイツの味方なの？」と言った。

「違う、違うアイツって誰のことだよ」

むろんフドウアキラのことだが、ここでそこまで素直に言うわけにはいかない。

「そう。じゃあ、写真のことがなんのことかもわからない。つうか初対面の人にそんなこと言われる筋合いはないわ」

違う。俺は君が死ぬところを見たんだ。そして君は俺に助けを求めた。そう言いたかったが。ますます誤解を招くだろう。作戦変更してフドウアキラの仲間ということにして・・・。

そんなことを考えていると、いつのまにかミナミヨウコはスタスタと歩き始めていた。

「待ってよ！とにかく君の命に関わることなんだ！」

彼女は無視して歩き続けた。

「クソッ」とにかく情報を集めるか。とりあえず写真がなにかってことだ。

俺は心強い仲間がいることを思い出した。携帯を取り出した。もうすぐホームルームの時間だ。はやく出てくれ。ナカニシの兄ちゃん。そう彼は俺の能力を理解してくれている。

「もし・・もし・・」眠たそうな声だ。目を覚まさせるか。
「兄ちゃん、例の能力が発動した。今度は俺が声を聞いた」
「なんだって！」効果は抜群だった。
「その人は俺と同じ高校の女の子ミナミヨウコだよ」
「なに！ヨウコが！それは本当なのか！」
「やっぱり。兄ちゃん知ってたか」
理容ナカニシは一部の学生では溜まり場になっている。ミナミヨウコの名も聞いたことがあった。
「ああ、俺のトコにくるヤツラの間ではアイドルだからな」
「今、彼女のことを調べているんだけど、彼女と一番仲がいいヤツは誰だい？」
「一番っていったら・・・やっぱりリョウだな。彼女の幼馴染だよ。センマルリョウ」
「センマル・・・」聞き覚えがあった。そうだ最初の一日で先生に頼まれてロッカーを一緒に運んだヤツだ。
「センキュー。なんとか彼女の死を阻止するよ」
「ああ、頼んだぞ」

俺は頭の中で今後のプランを立てた。

「はあ、やること多すぎだな・・・」

ためいきをついて、校舎へと向かった。

第10話「ミッドナイト・アンド・デイ・ドリーム」

ホームルームまであと、3分。俺は職員室に向かった。まずやっておかねばならない仕事がある。全部無視でもよかったが仕事をスムーズに行うためには今日起こることを先回りしておかなければいけない。

職員室に入ると担任と目が合った。ロッカーの整理をしている。例の捨てられるヤツだな。と思いつつ。

「先生、もうすぐホームルームじゃないすか。なにしてんすか」
「それは俺のセリフだよ。田所」
「いやあ、俺になにか頼みごとでもあんのかなあと思ったもんで」
「おっ。よくわかったな。コレ」
と封筒を渡す。

「ハイ」
「おう。それをな・・・」
「地府星大学にでしょ。えっと紺染教授に」

キョトンとする先生を後に俺は教室に向かった。

教室に入り席につくと同時に先生が入ってきた。
後ろの席のリンジが小声で話しかけてきた。

「トォルちゃん。どうしたんだよ。カナーリギリギリじゃん」
「まあな。いろいろと」
「ふーん」
「でどうよ。最近ハリコちゃんは？」

「あん？ああ、オンミョウジ先輩とメルアド交換したんだと」
「マジでか！んじゃオンミョウジのバイクの後ろに乗る日も近いなあ」
「バイク？」
「ああ、あいつバイク乗ってんだよ。バイクなんか詳しくねえけどなんか赤いやつ」

赤いバイク。ばあちゃんを轢いたのも。
しかしフドウアキラの言うことは怪しいし、俺は昨日のリンジとの会話との違和感を再び思い出していた。

「まさか」

「ん？どうした？」

「いや、なんでもない」

まさか。俺は一瞬ではあるがこれからとんでもないことが起きようとしている予感がした。後ろの席のリンジをチラ見する。

まさか親友を疑うことになろうとは。
お前にも協力してもらおうと思ったけど、オーケイ。そういうことならひとりで行動だ。

そしてもうひとつある疑惑が思い浮かんだ。
俺は携帯を取り出した。妹にメールを送る。
もし狙われるとしたら妹の可能性が高い。と直感したのだ。
俺がミナミヨウコを救おうとすればするほど。

昼休み。俺は2年生のクラスに向かおうとしていた。廊下にでると、

ルコがいた。

「ねえ」

「な、なに？」

やはりギコチない。

「トオル君の好きな人ってミナミヨウコさん？」

「好きなひと？」

ああ、そうだった。俺は完全にフラれるのが怖くてそんな嘘をついたんだった。

「違うよ。なんで？」

「今日朝、一緒にいたって聞いたから」

誰に？と聞こうとして視線に入ってきた男がいた。フドウアキラだ。俺とルコの会話が終わるのを待っているようだ。

まさか。

「フドウに聞いたのか」

「うん」

「まさかお前の好きなヤツって」

「・・・じゃあね」

ルカは彼のもとに小走りに走っていった。フドウアキラと目が合う。軽く会釈をしたがその目は笑っていた。

クッソ。

そして俺はフドウアキラと教室にいるリンジがわずかにアイコンタクトをとったのを見逃さなかった。

おそらく、ミナミヨウコの本来の死をもたらしたヤツと、運命を確実にしようとするヤツは同一人物だ。

とにかくなんとかしなくてはいかない。

俺は目的の教室へと向かった。センマルリョウのクラスへ。

教室を覗き込む。えっと・・・もうひとつの今日の記憶を頼りに彼を探す。

見つけるまえに知り合いと目が合う。数少ない後輩の知り合いの一人山下だ。

「あっタドコロ先輩どうしたんしんすか」

「ちょっと、センマルリョウってヤツに用事があってね。呼んでくれないか」

「イイっすよ。おーいセンマル」

背中を向けて友達2人と談笑していた男が振り返る。

なるほど、昼休み一緒にロッカーを運んだ男子生徒だ。あの時はなにも会話しなかったが・・・。まさかこんな形で再会するとは。

山下が手招きして彼を呼んでくれた。

「タドコロ先輩がなんか話あるって」山下は友達のトコロへ行ってしまった。

「なんすか？」

センマルリョウの顔は明らかに疑っていた。無理もない。向こうにとっては初対面だ。

「ここじゃあ、なんだから、ちょっといいかい」
「俺、なんかしたんすかねえ。けっこう慎ましく学校生活送ってるつもりなんすけど」
「ミナミヨウコのことで・・・」

ミナミヨウコの名が出た途端、彼の目が嘲笑の目に変わった。

「なあんだ。あんたもその類かあ。たまにいるんすよねえ。ミナミヨウコと仲良くなりたくて、幼なじみの俺んトコくる輩が」
「そういんじゃない。彼女の命が危ないんだ、とにかく場所を変えよう」
「はぁ？命？なに言ってんすか」
「とにかく、じゃあ、写真については？何か知ってるか？」

センマルリョウの顔色が変わった。
「あんた、それ誰から聞いた？」
「ちょっと小耳にはさんでな。なんの写真かはわからないが。君はその写真のせいで、彼女が危ない目にあっているのを知っているのかい？」
「オウケイ？わかったよ。先輩。場所を変えよう」

すぐそばで俺たちのやりとりを見守る女の子がいた。どこかでみたことがある。そうだ。ミス・フウリングスに出てたサルノシンコだ。間近で見るのは初めてだが、なかなかのカワイサだ。
「大丈夫か。P」
「P？変なあだ名だな」
「まっ。いろいろあってさ。大丈夫だよ、野ザル」

センマルリョウに促され廊下に出た。横にある階段を下りながら、センマルは話始めた。

「潜水艦事件、覚えてるか？」
余裕でタメ口かよ。と思いつつも俺は校内が騒然となった事件を思い出していた。
「潜水艦？ああ、あれか、二学期が始まると同時に、プールにドデカイ潜水艦が現れたってヤツ。確かアレでプールの改修工事が延びたんだっけ」
「あれ、やらかしたのは俺らなんだよ」
「まじかよ。スゲエことやらかしてくれたな」
「まっどうしても工事を延ばしたかったんだよ。で、そのときスクール水着仮面が出てきただろ？」
「ああ、俺は見てないけど、噂では聞いてるよ」
「俺たちは遊び心のツモリだったんだけど、それが仇になった。スクール水着仮面が着替えているところを隠し撮りされたんだよ」
「まさか・・・」
「そう、スクール水着仮面っていうのはミナミヨウコなんだよ」
「それが事件の全容か・・・」
「あんたいったい何者なんだ」
「俺は彼女が今日死ぬのを知っているんだ」
「はあ、あんた何言ってんだ？トゥルー・コーリングかよ」
その、トゥルー・コーリングなんだよ。と言いかけて。やめた。どうせ信じてもらえない。でも、お前は好きなんだろそのドラマ。
「とにかく、その写真で脅されてるんだな。ミナミヨウコは」
「ああ。でも俺たちにはどうしようもないんだよ。
「なんでだよ。脅してるヤツはフドウアキラってのは知ってるのか？」
「知ってるけど、なにか動こうとしても写真をばら撒く。なんだよ。俺たちは手が出せない」
「よし、わかった俺がなんとかしよう。でも協力してくれ、まず今

日彼女を外出させないように説得してくれ。できれば、彼女の家の前で見張ってて欲しい」
「まあ、よくわかんないけど説得はしてみるよ・・・いったい何が起きるっていいうんだ？」
「とにかく彼女を地府星大学に行かせないでくれよ」
「全然話、みえないんすけど」

センマルリョウはひどく不機嫌そうに言った。

「なあ、頼む。とりあえず俺の言うことを信じてくれよ」
「はあ。あっそういや職員室に呼ばれているんで・・・もういいすか？」
はぁは、こっちだよ。やっぱり信じてもらえないか。職員室？

「そっか。これから職員室に行くんだろ。悪りいけど、ロッカーはひとりで運んでくれよ」
「えっどういうことすか？」
「まあ、行けばわかるよ」

俺はこの場を立ち去ることにした。今の俺の発言で彼が動くことに賭けたいトコロだが自分でも動かないと。
ミナミヨウコにもう一度接触する必要があるな。と、彼女のクラスは・・・。
俺は思わず身を隠した（ドコに？だって？ドコでもいいだろ）。
クソっフドウアキラだ。そばにはミナミヨウコ。なにやら紙を渡していた。
フドウアキラが立ち去ったのを確認してミナミヨウコに近づいた。

「どうも」
「また、あなた。いったいなんなの？」

彼女は怪訝そうな顔で言った。
「フドウアキラにまたフドウアキラに呼び出されたのか？」
「あんたには関係ないでしょ」
「まあ、待てよ。あの紙切れには地府星大学の２号館屋上に９時って書いてあったんだろ。ってなんでわざわざ紙切れなんだろな？」
彼女はやはり「２号館」という言葉に反応した。

「そんなの作者の都合でしょ」

おいおい。作者をイジれるのは主人公の特権だぜ。
ミナミヨウコは教室に戻っていった。やはりこれ以上は無理か。あとは時間が来るのを待つだけだ。敵があの場所で対決するのを望んでいるようだし。
その気になればとっくに彼女に危害を及ぼせるが、その気配がないからだ。
携帯が鳴る。メールだ。妹のハリコからだった。

「なんで、そういう事聞いたかわかんないけど、お兄ちゃんだから答えておくね。オンミョウジ先輩のメルアドは直接聞いてないよ。同じＬ４のフドウさんから聞いたの。それにしても長い１０話だったね」

バーロ。最後の１行は余計だあよ。お前まで作者イジリかよ。しょうがねえだろ。あと２話で完結するつもりなんだから。

しかし、これで確証は揃った。

「今日は外出するなよ」

俺は妹に返信した。

さあて。全面対決といきますか。

第11話「シー・サイド・ハー・サイド」

家に帰ってジャージに着替えると、俺はベッドに座った。

「あと4時間か・・・」

そうつぶやいて寝っころがる。果たしてミナミヨウコを救えるか。その前に敵はあの場所で勝負してくれるのか。とにかく、地府星大学へ行かねばならない。

突然、眠気が襲ってきた。

「ふあぁ、考えてみれば24時間寝てないのか・・・」

あくび交じりの独り言をつぶやく。

気がつくと。まだベッドの上。何か夢を見ていた気もするが・・・。

「ヤッベ！」

あわてて飛び起きる。時計を見ると9時2分。

俺はあわてて飛び出した。玄関先で母親が何か叫んでいたが。無視した。

大学の前まで来る。もちろん門は閉まっていた。迷わず門のそばにある守衛所へ向かった。

「ねえ、おっちゃん」

「んあ。なんだい？」

向こうは初対面だがこっちは知っている。まるで片思いの一種じゃねえか。

「さっきここ女の子通らなかった？」

「ああ、2号館の場所・・・」

「やっぱり！おっちゃん救急車呼んでおいて！」

「な、なに！」

「いいからいいから」

俺は走り出していた。たぶんおっちゃんは救急車を呼んでくれないだろう。しかし賭けてみる価値はある。せっぱつまった高校生の願いに。

走り出して気がついた。俺は2号館の場所を知らない。聞く前に朝に戻ったのだ。建物の場所までは辿りつけた。

「くっそ、どっちだよ。聞けばよかったな」

だが入り口をみると「2号館」と書いてあった。

「なんだ。楽勝じゃん」

鍵はかかっていない。屋上へ急がねば。

屋上まではすんなり行けたが人気がない。俺は屋上のすみずみまで探そうと歩きだした。

向こうに人影が見える。俺は走った。
人影は3つ。
「おい、待てよ」
叫んだところで気がついた。
その人影は隣りの建物の屋上にいたのだ。
「なんで？」
人影のひとつがこちらがわに向かったきた。ようやくフドウアキラと認識できた。
「とうとう。おでましだな。トオル君」
「なんで2号館じゃないんだ、おい、リンジ、お前だろお前が変えたのか」
もうひとつの人影が近づいた。もうひとりを連れて。リンジとミナミヨウコだ。
「ワリぃなトオル。金に目がくらんでな」
リンジは言った。
「お前が能力者なのはわかってたよ。そこにいるミナミヨウコが死んだ朝、お前は、俺のばあちゃんが死んだ1度目の朝の話をしてたからな」

「お話の途中悪いが」
フドウアキラは続ける。
「別に誰が能力者とか関係ない。僕たちと君は敵同士だ。それに僕たちはきちんと対決しようと思ったよ。だからミナミヨウコを同じ場所に呼び出した。２号館の隣りの建物に来い。とね」
クソ。そういうことか。
「実をいうとね。彼女が死んだのは事故だった。落ちた後、リンジが行こうとしたんだよ。さすがに運命とはいえ自分たちが関わるとなると夢見が悪い」
「よくいうよ、ばあちゃんを殺したくせに！」
「それに関しては、説明しよう」
「説明もなにも、その通りだろ！お前らは罪をオンミョウジに着せようともしてたよな」
「誰に罪を着せようって？」
背後で声がした。
振り返るとオンミョウジがいた。
「ま、まさか」
「別に黒幕が俺ってわかってもよかったんだけどなあ」
「くそ。自分で黒幕言うなよ」
「あの日、そうミナミヨウコが死んだ日」
オンミョウジはミナミヨウコをチラリとみた。ミナミヨウコはきょとんとしている。無理もない自分が死んだ話だ。

「あの日、俺はここにはいなかった。がしかし、今日の朝リンジからメールが来て驚いたよ。またあの能力が発動したとね。しかし、今回は君が助けを呼ばれたほうだ。とね。君のおばあさんが亡くなった日。俺たち3人はミナミヨウコを呼び出して向かうところで事故を目撃していた」

「驚いたよ」

リンジが口を開く。

「おまえのおばあちゃんが倒れていたから慌てて駆け寄ったんだ。そしたら突然言われたんだよ『助けて』ってね」

「なんで、なんで俺に言ってくれなかったんだよ」

「言おうと思ったさ。でもな。俺はやっぱり、運命には逆らわない方がいいと思うんだよ」

「で、俺たちも同意見だったわけ」

フドウアキラがニヤけながら言った。

「でも、俺たちは君も能力者だすぐに気がついたんだよ。君は2回目の時様子が違ったからね」

「なんで、なんで俺には言わないで、こいつらには言ったんだよ」

「それは僕らは『あの人』に仕えているからだよ」

あの人？くそ。まだラスボスがいるってのかい？

「とにかく君が能力者だと気がついた僕らは君を監視していた。案の定、君はおばあちゃんを助けた」

「当たり前だろ！もういい。説明はたくさんだ。彼女を離せ！」

「あの人は言ったんだ。お前がおばあちゃんを助けたときに」

オンミョウジが言った。

「死ぬ運命のものが変わってもいいが、彼女だけは特別だ。今死んでもらわなくては」ってね。

「何が言いたい」

「今日死ぬのはミナミヨウコじゃなくてもいいってことさ」

「なんだって」

「お兄ちゃん。どうしてここに！」

自分がいる2号館の屋上の扉が開いていた。ハリコが立っていた。

「ねえ、フドウ君、これどういうこと」

隣りの（たぶん1号館だ）建物に人影がひとつ増えた。

「ルコ・・・」

「まあ、君の妹が僕に興味を示したのは偶然だよ。君のモトカノがフドウに惚れたのもね」

なんて嫌な偶然なんだ。都合よ過ぎだろ作者。

「さあ、どうする？」

オンミョウジは不敵な笑みを浮かべた。

第12話「ループ・エンド・ループ」

「きゃあ」

ハリコが悲鳴を上げた。オンミョウジが手をつかみ、屋上のヘリまでハリコを連れて来る。

「おい、やめろよ」

「どうしたんですか、オンミョウジ先輩」

「すまんねえ、君の好意は嬉しいが。俺、ここんとこフラレまくってるし」

ま、そんなの関係ねえ。か」

おいおい設定は２００５年だぞ。そのフレーズは早すぎる。

と、つっこんでいる場合ではない。

隣りの建物をみると、すでにミナミヨウコとルコが屋上の端に立たされていた。

「くっそ」

「さあ、どうする。本来の歴史のようにミナミヨウコか。愛する妹か、愛したルコちゃんか」

「ハリコ。こうなるならオンミョウジは止めとけって言っておけばよかったな。ルコ、２回目のあの日お前へしっかり思いを伝えておけばよかったよ」

「えっと、私になにかないの？」

ミナミヨウコが言った。いやいや、軽くボケられても。

「そうだな。俺がつきとまった理由がわかっただろ。本当は君が落ちるハズだったんだ。感謝しろよ」

俺は屋上の端までいく。隣りまでの距離は5メートルはあるだろうか。助走があってもなくても飛び移れない。まあ、そのつもりもなかった。

ルカと目が合った。アイコンタクト。下をチラ見。

わかってる。俺もその手を考えてる。

「リンジ最後に言っておくよ。許さねえからな。フドウ、あんたも。オンミョウジも」

「最後？すると？」

「ああ、俺が死ぬ。死ぬ運命にあるのは俺でいい」

「そうか。『あの人』も納得するだろう」

だから誰だっつうの。

「待って」

ミナミヨウコが言った。

「私だったんでしょ。話を聞くと。その死ぬ運命だったってのは」

「おい、その手にはのらねえぞ。いいか、一度目の今日、お前は逃

げようとしてここから落ちたんだからな」
フドウアキラが言った。

「ヘイヘイ。争わねえって」

俺は思いっきり飛び降りた。リンジが驚いていた。俺にではなく自分が捕まえていたミナミヨウコも飛びおりたからだった。自分も落ちそうになろうとしたところをフドウに助けられていた。そのスキにルコは逃げていた。

そこまで確認して（それにしても滞空時間が長いのは置いておこう）俺が目指したのはもちろん地上ではなく1号館のクーラーの室外機だった。
あそこに掴まれば。5階の室外機に。

だが現実はうまくいかない。ものすごい勢いで落ちる俺は4階の高さまで落ちていた（それにしてもスロー過ぎるのは置いておいて）

なんとか4階の室外機に手がかかり、俺は衝撃とともにぶら下がることに成功した。思わず離しそうになったが。なんとか持ちこたえた。だがやばい。

手が離れるかどうかのところで誰かが俺の手を掴んでいた。

「ミギー！」
「誰よ。ミギーって」
ルカは言った。室外機のそばの窓から身を乗り出していた。顔は真剣だった。無理もない男の体重を支えている。

「いやいや、こっちの話。サンキュー」
俺はなんとか窓のヘリを掴み、室内に入った。
「あいつらは？屋上の・・・」
かなりの息切れで聞く。
「大丈夫。鍵かけてきた。時間は稼げるわ」
内側から鍵、かけられるのか？まあいい。ご都合主義だと言われようと。
「まだ終わってねえか」
窓から2号館をみる。
「わーお」
2号館の5階の室外機に必死でミナミヨウコがしがみついていた。
「運命とやらを変えなきゃな。ルコはそこで、そこも危険か。とにかくどっかに逃げて！」
俺は走り出していた。
2号館まで行き、5階までいっきに駆け上る。
いまだしがみついていてくれたミナミヨウコを引き上げる。
「ダイジョブか」

「ええなんとか」

「あんた運動神経いいんだな。俺なんて４階だぜ。落ちすぎだろ」

「あたしもイチかバチかよ。でも一人だったらやばかったかも」

俺はそのとき彼女はもしかして、１回目の今日でも同じことをしようとしたのか。と思ったが口に出すのは止めた。彼女には確かめようがない。

「それより屋上にいかないと」

「そうだった」

屋上の扉を開けるとオンミョウジが倒れていてそこにはルコともう一人がいた。センマルリョウだった。

「リョウ！どうしてここに！」

「ああ、コイツに言われて」

俺を指差す。

「あんたの言う通り俺、ひとりでロッカー運んだじゃんかよ。それでも信じられなかったけど気になってヨウコの家に行ったんだ。そしたらヨウジ君がヨウコはいないっつうから」

「ヨウジって？」

「私の弟。中１」

なぜここでここまで詳しく彼の話が出てきたのか。作者の意図を感じる。

「手遅れかとも思ったけど、あんたがここの話してたからさ。守衛のおっちゃんに聞いたらここに向かったって聞いて」

「で、俺の妹を助けてくれた。と」
俺はルコを見た。ヤバイ。センマルを見つめている。恋の目だ。懲りないやつめ。
「あいつらは？」
俺は1号館の屋上を見た。誰もいない。
「逃げたな。まっ後でなんかするか。メモリースティックも取り返さないと」
「ありがとう」
ここにも恋が生まれてくれると嬉しいが。
「おい、待てよ。これ最終話だろ、けっこう解決してないこと多いぞ」
センマルが慌ててていった。
「えっ、お前のときもあっただろ」
「まさか」
「そのまさか。だよ、まあもうひとつのエンディングっつうよりまとめだな。まとめ。とりあえず、これでミッションコンプリートだな」
遠くで救急車のサイレンが鳴っている。
「おっちゃんにも賭けて正解だったな。ちと遅いが」
おしまい。だけど「もうひとつのエンディング」に続く。

最終話「もうひとつのエンディング」

あれから、2週間後、俺はメモリースティックの奪還に成功した。リンジとは口を利いていない。

そしてオンミョウジ、フドウが言っていた「あの人」の存在を聞き出すことはできなかった。

というのも、あの一件以来、彼らは「あの人」と連絡が取れなくなったという。

だが、俺のばあちゃんのことを知っていたし、どこで知ったかリンジと俺が例の能力を持っていたことも知っていたらしい。

そして、ここが重要だったのだが、俺のばあちゃんの命を奪ったのは「あの人」である。と3人は証言した。

それが本当なのかどうかはわからない。

彼らは「利用されただけ」を主張している。

これは次回作への伏線なのか。それとも高校生を殺人犯にしたくない作者の配慮なのか。

とにかく俺はもうあの能力を発揮することもなかった。ミナミヨウコとは恋愛関係に発展することもなく、ルコとよりを戻し、平々凡々と暮らしている。適当な専門学校に行って。妹のハリコはセンマルリョウに恋をしていたが、結局フラれ（どうやら彼女がいるらし

い）。しかしながら彼女が高校３年生のとき、壮大な事件に巻き込まれたことを俺は知るよしもなかった。

これで一応全ての伏線は拾えたか？それが俺の今の不安だ。しかも作者のやつめまたもや伏線めいたものを残してやがる。Ｌ４と全面対決させるといっておいて結局２人としか対決してないし。ちゃんと次回作に繋げてくれよ。俺が主役じゃなくてもいいからさ。まあいいや。俺の話はこれでおしまい。

最終話「もうひとつのエンディング」（後書き）

ようやく書き終わりました。いろんな伏線を散りばめたつもりですが結局うまく回収できずでした。完全に作者の力不足です。ロッカーのくだりとか、メモリースティック奪還のくだりとか、凝った展開を考えていたんですけどねえ。読んでいただきましてありがとうございました。パクリ小説は3部作の予定です。では次回作で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8612c/

トォル・コーリング

2010年10月10日13時20分発行